

ダイバーシティ担当 菊池理事が行く！ 学部長・機構長インタビュー — 理学部 編 —



岡田学部長

飯沼先生
(ダイバーシティ推進委員)

各学部の男女共同参画状況や課題、ダイバーシティ推進室への期待や要望について、令和4年11月にダイバーシティ担当菊池理事とダイバーシティ推進室室員から、理学部の岡田学部長とダイバーシティ推進委員の飯沼先生へのインタビューを実施しました。

自分らしくいるきっかけ

ダイバーシティについて色々お伺いさせていただきます。

価値観や経験など、それぞれですが、**ホッと安心し、自分らしくいられる瞬間**には、その人ならではのダイバーシティの価値観があるのではと思います。岡田先生は、チバニアンで世界的な研究者でもいらっしゃいますが、研究を地道に継続されるということは大変なこともありますよね。

今の自分に繋がる最初のきっかけ、岡田先生の「心を動かしたきっかけ」は何ですか？

先日、本を出版する時に、生い立ちから書いてくださいと言われておりました。今までまったく意識していなかったのですが、生い立ちを書きながら、今の研究者の道に進んだきっかけは、実は、**学生時代、自分がキャンプをした時**にあるという事が分かりました。

それまでは、自分が何をやっていくかについて、特に決めていなくて、なんとなく地学や理系は好きだったものの、将来は、**カメラマン**になるのも良いなと思っていました。

その時、キャンプ場で出会ったカメラマンの人が、「自分は、研究者になりたかった」と話し始めました。この人は、カメラマンという職を得ながらも、昔やりたかったことが、今は出来ていない。後悔もしているのだと感じました。私は、ものづくりが好きで工学部に行く希望もありましたが、後悔はしたくない。一番好きなことは、**地球のことを調べる**こと、だから地球科学にしようと決断したんです。



菊池理事



岡田学部長

ダイバーシティへの取り組み

過去数十年を見てみると、でいろいろな「違い」を受け入れ、日本社会や状況は、良いところも悪いところも含め、だいが変わってきています。

理学部でのダイバーシティの取り組みについて状況を教えてください。



私は、地球科学の研究者として、すべてを俯瞰的に観察する癖がついているんですが、

例えば、今の大学教員が大学生だったころの男女比率を考えると、その比率以上には絶対にならないんですよ。女性の数がすごく少ないんです。そこがもう違うので、理学部で女性研究者を多くするなら、比較的女性の多い分野を拡張させるしかないと思っています。

だからと言って、女性ばかり採用しましょうとなると、今度は応募しようと頑張っている男性が報われませんよね。

マイノリティー(女性教員)という枠組みをただ強化することは、逆に、壁を作ってしまう、ということもあるかもしれません。フォーカスしすぎず、バランスを見る。難しいですね。

研究者が女性か男性かを考える必要はないですが、多分、研究者になろうとする段階で「女性だから」という圧力が社会全体のいろんなところからかかっているのではないかと、とは思います。いろんな組織でその圧力をなくそうとしていますが、社会全体はほとんど何も変わっていないように感じて、もどかしいですね。

もどかしいですね。

こちらのインタビューに同席してくださっている飯沼先生のように、女性が、生き生きと研究や生活をされている姿が、これからの未来を生きる若い人たちに伝わっていくといいですね。世代を超えたバトン、時間はかかりますけど。



飯沼先生は、子育てしつつ、大学に職を得て、研究をされている。

今の女子中高生が、飯沼先生のような研究者を見て、理系好きな彼女たちに、理系は将来進むべき道がある、現実的なものがあるということを知ってもらうこと、彼らの夢や希望を繋げていくこと、私たちは、その取り組みをしないとイケないんですよ。

大きな成果が上げられるかわれれば、そんなことはないかもしれませんが、10年20年後ぐらいを見て、ですね。リケジョの取り組みというのも無駄ではないんです。だけでもっと効率的に、積極的にアクションすべきかな、とは思っています。



これからの取り組みについてお聞かせください。



飯沼先生
(ダイバーシティ推進委員)

理学部は、「女性だから」「男性だから」とか「若いから」「歳だから」とかそういうのは割と少ないんですよね。助教とか教授とか関係なく均等に研究費を配っているというのがありますし。

雇われたら研究者なんですよ。そこはフラットなんです。

なので、男女比率も均衡化されていない。だから、この状況をなんとかしないと、という強い思いも生じにくい。

教員は自然と育っていくものですからね。



「一人じゃない」と思える環境は、大切ですね。一人で悩みを抱えている人もいると思うので。

ただ、「女性教員」という枠組みがあって、応援している人や機関が存在するという事は発信すべきと思うんです。「枠で囲う」というよりも、「使う」「使わない」は自由だけど、大学には、常に頼れる場所があって、仲間がいて、ということ発信し続けることはすごく重要で、私は、茨城大学のそういう部分に、すごく勇気づけられているんですよね。

意識付け

理学部でのダイバーシティの意識付けについて教えてください。

将来的なことを見据えて、女子学生を増やすことや、そこから大学院への進学を勧めるというアクションはできるので、そこは積極的に行いたいですね。

私は、女性研究者の生き方がもっと多様になるべきだと思っています。研究者になったからといって、100%理想像になる必要はなくて、いろんな生き方があるから、「女性だから」という言葉に縛られるのはやめようよと。

茨城大学の女性教員でもいろんなパターンの女性教員がいて、どういう生き方も輝いているんだって思います。

その時に女性教員がいて、研究しているんだという姿を見せたいですね。しかも子育てもしている人もあって。今を生きる女性教員たちの姿を見る機会を作ることによって将来的に女性研究者の増加につなげていきたいと思っています。

男性教員も同じです。ただ単に「研究が楽しいから進学しちゃった」という道でいいんだよ、というような感じがあるといいかなと思います。

